

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	高道 由子
論文題目	感情経験と布の価値 —東ネパールにおけるダカ織りの民族誌—		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究はネパールにおけるダカ織りについての民族誌的研究である。ダカと呼ばれる複雑な幾何学模様織り込まれた東ネパールの手織物は、大変手間のかかる技法で織られ、多大な時間を要する。ダカを織ることは、ドゥカコカーム(苦勞のともなう仕事)と言われ、織るときの苦勞の経験は、必ずしも織り手や生産に関わる人々だけでなく、ダカに関わる人々の間で、異なるレベルで共有されている。このように多様な人々の間で常にずれやねじれを帯びながらも共有される、つくる人の苦勞の経験は、モノとしてのダカの価値に大きく関係しているように見える。本研究では、東ネパールのダカを対象として、モノをつくる経験が、モノの価値をめぐる人々の葛藤や討議・交渉といかに関わっているかについて、文化人類学におけるモノの価値や真正性、市場に関する議論を参照しながら検討する。</p> <p>本研究では、次の3つの問いについて検討する。まず、ダカを織る行為における織り手の苦勞の経験とはいかなるものであるか、次に、それがどのように多様な人々に共有されているのか、最後に、その共有された経験は市場において、どのように討議・交渉されるのかである。その問いに答えるため、本研究は学習理論における実践コミュニティ理論を分析枠組みとして用いる。これにより、生産者と消費者、買い手と売り手、織元と織子といった役割の区分や、工房、開発団体、民族といった制度的なコミュニティの内と外といった区分を取り払い、ダカの実践コミュニティの同心円に参加した多様な人々と、円の中心にいる織り手との間の距離や関係性が、経験の共有やモノのやりとりと、いかに結びついているか捉えることを目指す。</p> <p>第1章では、ダカというモノそれ自体およびダカの帯びる複数のイメージがいかに形成されてきたかについて、18世紀後半の東ネパールのネパール王国への統合、外国からの開発援助、1990年のネパールの民主化とともに興隆した民族運動およびネパール国民文化創出の動きといった社会経済政治状況と関連づけながら検討する。それにより、開発の文脈や国家の象徴、民族の伝統といった、それぞれ一元的な角度からダカについて捉えてきた先行研究を批判し、視座を広げる。</p> <p>第2章では、調査地域であるM町の概要と同地におけるダカの地域的展開について、1980年代にイギリス政府とネパール政府の協力のもと実施された開発援助プログラム(KHARDEP)との関わりから検討する。ネパールの手工芸研究のほとんどが、開発援助やフェアトレードにおける狭い枠組みにおける生産者のエンパワーメントの成否を問うているのに対し、本研究では地域のものづくりが開発援助を契機にいかに変容した</p>			

のか、プロジェクト終了後も含めた長期的視野の下でのものづくりの変化の過程を含めて捉える。

第3章では、KHARDEP終了後も、KHARDEPが想定していた形とは別の形で生産が継続する、M町におけるダカの生産実践に焦点をあて、人々の日常世界の中でダカがいかにかに生産されているのかについて検討し、制度的視点が等閑視してきた生産に実際に携わる人々の視点から、その様相を捉える。

第4章では、筆者自身が工房でダカを織りはじめた経験による、ダカに対する見え方や工房における関係性の変化を踏まえながら、工房の人々がダカを織る苦労の経験をどのように共有しているのかについて、人々の語りや工房で起こる小さな事件の事例を通じて描く。本章の事例を通じて、ダカを織る苦労の経験とは、織ることそれ自体による身体的経験にとどまらず、そこに生きる人々の全人格的な経験であることを示す。さらに「わざ」の習得や生産実践コミュニティへの参加を通じて、たとえそこに共同作業や楽しい会話が繰り広げられなくとも、人々は他者のかなしみや辛さといった生きる経験を共有している可能性を指摘する。

第5章では、ダカを織る行為や経験が、価値として討議・交渉される場としての市場におけるやりとりを取りあげる。東ネパール地域は外国への出稼ぎやグルカ兵としての英国軍への参加などから、早くから貨幣経済が浸透した地域である。しかし貨幣経済が浸透しているからといって、そこでは匿名的で均質的な取引が行われているわけではない。本章では、M町のバザールにおける具体的なやりとりの中で、他者のまなざしをいかに操作するかに主眼をおいてきた真正性の議論に対して、前章までで見てきたダカを織る苦労という真正な経験を共有しながら行われる討議・交渉のあり方を提示する。

終章では、M町のダカの事例では、モノをつくる行為におけるつくり手の経験が、人々の間で多様な形で共有され、市場においても、モノの価値として討議・交渉に大きく関わっていることを結論として述べる。そして、モノをつくる苦労の経験をモノの価値として重要視する本研究の事例と、モノの価値が市場における匿名の取引で決定される社会との間に連続性がないわけではなく、実践コミュニティ理論において参加者の位置が常に変化しその境界も制度との関わりの中で常に揺れ動くように、モノをつくる人々の苦労の経験を知らうとし、想像することを通して、一見、異なる価値体系にいると思われる人々の間にも、モノの価値の共通の基盤がつくられていく可能性が常に開かれていることを指摘する。